

播州の蓮如堂

本堂南脇に寄り添うように蓮如堂（中宗堂の別称）がある。ここには吉崎や山科と同様、蓮如上人の由緒深い別院の証として別に堂宇を設け、上人のお木像をご安置している。本願寺ならびにその教団が偏に蓮如上人の真宗再興の志によって創設された歴史的事情をよく示している。

播州のお念仏の出発は、蓮如上人の意向を拝した空善が本願寺の拠点を開発したことに始まる。本徳寺は、上人の直接のご下向は実現しなかったが、播州門徒の意気によって上人のご晩年より立ち上がり、本願寺の最西端の寺内町として重要な役割を果たしてきた。その英賀寺内町（本徳寺）は港湾を有し瀬戸内海に勢力をもった一向宗門徒の中継港として大いに繁盛し、西国からの物資はこの地を経由して大坂・近畿に運ばれたようだ。このように中世戦国時代には大坂石山本願寺との関係を深く持ちながら西日本への教線拡大の最前線基地として機能し、後半の戦時には大坂石山本願寺を支える毛利・村上水軍の軍事拠点として大きな役割を果たした。

亀山に移築後も、このような歴史的経緯から本徳寺に中宗堂が建立された。この時期に、吉崎や山科でも中宗堂の建立が行われている。日本において庶民の観光（本山参りが大義名分）が始まる時期に当たり興味深い。この時代、播州の亀山本徳寺は西国録所としてまた播磨の真宗本寺として広範な門徒衆の崇敬を集めていたため、西国からの参詣も多く、京都上山の代役も果たしていた。そのようなこともあって、吉崎や山科と同様に蓮如上人建立の由緒を示す象徴的建造物として蓮如堂が建立されたことがわかる。江戸末期の火災による消失後、明治31年に再建されるが、その動機として、明治15年に、朝廷より東西両本願寺に対して蓮如上人に慧燈大師の下附があり、その記念事業の一環が一様考えられる。昭和18年に吉崎の中宗堂が火災で消失したため、内陣（祠堂）と外陣（拝殿）をもつ本格的な中宗堂は山科別院と本徳寺のみが現存することとなった。このように堂宇の歴史的履歴が明確であるため国指定登録されている。本徳寺の蓮如堂は、山科と比較して祠堂の向拝方向が異なり、外陣が一回り大きい。



亀山本徳寺境内の蓮如堂（国指定登録文化財）



蓮如上人像・本徳寺蓮如堂御安置

このお堂の内陣・厨子には上人お木像がご安置されている。このお木像には「あるとき上人が播磨の地に来られ、お念仏のお法りを播磨の人々に伝え、共に喜ばれた。しかし、本願寺に帰らねばならぬ故、門徒衆がなげきなかしみ、ご逗留を願ったが適えられず、その代わりにご自作のお木像を残して行かれた。」という伝承がある。このような由緒は各地に散見され、今の時代感覚からは荒唐無稽のものと思いがちであるが、その当時の、お念仏を喜ばれた人々の身において考えると、今までとはことなる世界が見えてくるようである。

空善は播磨の出身と伝えられ、明応3年（1494）夢告で蓮如上人を宗祖親鸞聖人の後身であると感得し、御堂衆の一人として終生蓮如上人に使えた人物である。空善は、上人が母を慕うて西遊の志あるを聞き、西国教化の拠点坊舎を播磨国飾磨郡英賀に造ったと言われているが、英賀開教の直接的動機とは言い難い。いずれにせよ空善の功績より、16世紀の末に本願寺の播州における拠点が創出された。今につづく本徳寺の濫監である。その後、空善は上人の遷化に際し山科で親しく病床に侍し看護の労を執った。後に空善聞書一卷を作って上人の平素の言行を伝えた。ついで実如に遣え、

多屋八人衆の一人として活躍し、自身は延末の法専坊に住した。光徳寺は空善の隠居所として知られている。晩年の蓮如上人の播磨へのおもいを空善聞書に次のように告げている。「ある時仰せに、わか御身の御母は、西国の人なりとき々及候ほとに、空善をたのみ、播磨までなりともくたりたきなり、わか母は我身六の年にすて、行きかたしらさりしに、年はるか後に、備後にあるよし四条の道場よりきこえぬ、これによりて播磨へくたりたきと、いひければ、空善はしりまはり造作し候よし候、命あらはひとたひくたりたきなりと仰候き。」

